

# 東亜同文書院の内蒙古調査旅行

森 久男  
ウルジトクトフ

はじめに

- I 東亜同文書院の内蒙古調査旅行の発端
- II 清末期の内蒙古調査旅行
- III 満洲事変以前の内蒙古調査旅行
- IV 満州国成立後の内蒙古調査旅行（以下次号）
- V 蒙疆地域における現地調査旅行
- VI 内蒙古に関する調査報告の刊行状況

むすび

参考文献

## はじめに

20世紀初頭、日本勢力の対外拡張政策が本格化し、「満蒙地方」（中国東北地方）にその影響力が浸透するにつれて、内蒙古地方における調査活動が本格化していった。のち、1932年に満州国が成立し、1937年に蒙疆政権が誕生するや、西部内蒙古のアラシャン・オジナ地方を除く内蒙古の広大な地域が、日本の占領地統治下に置かれた。その結果、日本軍・政府職員から民間人にいたるまで、日本人の内蒙古への進出が加速し、内蒙古の全域で各種の調査活動が実施された。

現在残存している各種の日本語資料から判断すると、当時の内蒙古における調査活動は、おもに内蒙古とその周辺の日本領事館、関東都督府、南満州鉄道株式会社、東亜同文会、善隣協会、興亜院、満州国政府、蒙疆政府によって実施され、このほか特定の民間人による調査記録も残されている。その内容は、内蒙古の政治・経済・資源・社会・風俗習慣等の各種分野に跨っており、内蒙古近代史や内蒙古を中心とする近代日中関係史を研究するにあたって、とても貴重な資料源を提供している。

戦前期内蒙古における日本人の調査活動に関する先行研究としては、吉田順一「興安四省実態調査について—非開放蒙地の調査を中心に」（『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第4分冊、1997年）、「関東都督府陸軍部の東部内蒙古調査報告書」（『日本モンゴル学会紀要』1998年）、「日本人によるフルンボイル地方の調査—おもに畜産調査について」（『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第4分冊、1999年）、房建昌「従档案看日本興亜院蒙疆連絡部及其对蒙古族地区的调查研究」（『蒙古学信息』2001年第4期）、房建昌「日本興亜院蒙疆連絡部与蒙古善隣協会西北研究所始末及其对西北少数民族的调查研究」（『西北民族研究』2002年第3期）がある。日本による中国全体の調査活動を対象としながら、部分的に内蒙古調査について言及しているものとしては、本庄比佐子等編『興亜院と戦時中国調査』（岩波書店、2002年）、井村哲郎「日本の中国調査機関—国策調査機関設置問題と満鉄調査組織」（『帝国日本の学知』第六巻、岩波書店、2006年）、藤田佳久『東亜同文書院の中国大調査旅行研究』（大明堂出版、1999年）、原覚天『現代アジア研究成立史論—満鉄調査部、東亜研究所、IPRの研究』（勁草書房、1984年）等がある。

戦前期日本の内蒙古地方における調査活動の研究を通じて、それら調査活動によって解明された歴史事実のみならず、日本語で記された各種の調査資料の形成過程、内容、史料価値、資料保存状況の全貌を、鳥瞰的に把握することができる。

本稿では、おもに愛知大学豊橋図書館が所蔵する、東亜同文書院が中国各地で実施した調査報告書や旅行日誌を利用して、同文書院の蒙古地域における現地調査旅行や調査報告書の内容について整理をおこなう。

1901年に東亜同文会が上海で設立した東亜同文書院は、半世紀近くにわたって中国各地で大規模な現地調査旅行を実施してきたことが知られている。その調査活動の意義については、『東亜同文会史』（霞山会、1974年）、『東亜同文書院大学史』（滬友会、1982年）、藤田佳久編『東亜同文書院中国旅行記録』（第1－3巻、愛知大学刊）、藤田佳久「東亜同文書院中国大調査旅行の研究」（大明堂、平成12年）、薄井由「東亜同文書院大旅行研究」（上海書店出版社、2001年）、翟新『東亜同文会と中国—近代日本における対外理念とその実践』（慶応大学出版会、2001年）等の研究成果が発表

されている。

他方、中国においては、蘇智良「上海東亜同文書院述論」（『档案与史学』1995年第5期）、单冠初「試論東亜同文書院的政治特点—兼与西方在華教会大学的比較」（『档案与史学』1997年第1期）、房建昌「東亜同文書院档案的發現及其価値」（『档案与史学』1998年第5期）、桑兵「日本東亜同文会広東支部」（『中山大学学報』2002年1期）、趙文遠「上海東亜同文書院と近代日本の侵略活動」（『史学月刊』2002年9期）、周德喜「東亜同文書院始末」（『蘭州大学学報』2004年3期）、藍勇「近代日本の長江中下遊地区における調査とその影響」（『中国地理歴史論叢』第20巻第3号）、周德喜「日本東亜同文会と天津同文書院」（『歴史教学』、2005年5期）等の研究成果が発表されている。

本稿で蒙古と呼ぶ地域は、清朝時代から二十世紀中葉にかけて、様々な変遷を遂げ、蒙古という名称に対する認識は、著者によって異なっている。清朝期、蒙古は「外藩蒙古」「内属蒙古」と呼称されていたが、民国期になると、外蒙古が独立して、内蒙古にいくつかの特別行政区（のち、省）が設置され、「已設治蒙旗」（県治が施行された蒙旗）と「未設治蒙旗」（県治が施行されない蒙旗）という表現がしばしば使われている。他方、日本人の著作物には、「満蒙」「東蒙古」「開放蒙地」「非開放蒙地」という用語が使用され、のち「蒙疆」という表現も出現している。本稿では、蒙古という地域概念を用いる際、蒙古地域の時代的变化や各著者の用語法を考慮しながら、その変遷を視野に入れて置いて考察をすすめる。

（付記。本稿は大幸財団の研究助成に基づく研究成果である。ウルジトクトフが全体の草稿を纏め、森久男が文章表現上の調整を行った。「Ⅴ 蒙疆地域における現地調査旅行」は、森の責任で執筆した）。

## I 東亜同文書院の内蒙古調査の発端

東亜同文書院の設立後、1902年に第一期生が最初に芝罘・威海衛等の山東地域に二週間の調査旅行を実施してのち、第二・第三・第四期生も書院教授の指導のもとで京津地域（北京・天津一帯）や揚子江流域で調査旅行を実施している。

1902年に日英同盟が締結されてのち、イギリスは新疆と外蒙古地域におけるロシアの動向調査を日本側に要請した。そこで、外務省の囑托を受けて、東亜同文書院第二期生の林出賢次郎・波多野養作・桜井好孝・三浦捻・草政吉等の5人が実際の調査を行った。これは同文書院による大規模な調査旅行の一つの契機となった。

当時の調査旅行に関する研究としては、大林洋五『新疆を訪れた日本人―附波多野南山「新疆偵察記」抄』（『愛知大学国際問題研究所紀要』、第54号、1974年3月）、藤田佳久「波多野養作の中国・西域踏査旅行について―東亜同文書院の中国調査旅行実施への契機となった踏査旅行記録から」（『愛知大学国際問題研究所紀要』、第95号1991年）、「波多野養作の『西域地方事情』ノ・ト―中国・西域踏査旅行報告の付論から」（『愛知大学国際問題研究所紀要』、第98号、1993年）等がある。しかし、波多野の調査旅行は詳しく紹介されているが、他の四人の調査旅行についてはあまり触れてられない。そこで、新たに発見した資料を基礎として、五人の調査旅行、および外務省に提出された報告書について簡単に紹介しておこう。

#### ①林出賢次郎「清国新疆伊犁地方視察復命書」

新疆派遣員林出賢次郎。1882年生、和歌山県出身。1902年、東亜同文書院商務課入学、1905年3月卒業。1905年5月、他の四人と一緒に東京を出発して北京に到着。7月に北京出発・西安・蘭州・哈密・迪化を経て、1906年4月に伊犁到着。同地に5カ月滞在し、9月に庫爾喀喇烏蘇にある蒙古郡王府に到着。同地に1カ月以上滞在后、ふたたび塔爾巴哈台等へ調査に行き、12月に同王府を経て、1907年5月に北京に帰着。

今回の調査旅行から帰国後、林出は『東亜同文会報告』（第93回、1907年6月）において「新疆旅行談」を発表し、1938年に東亜同文会の機関誌に「三十年前の伊犁行回顧」（『東亜』29巻第6号）を発表している。しかし、外務省へ提出した「清国新疆伊犁地方視察復命書」が公開される以前、マル「秘」資料として、非公開であったため、研究者の間でもよく知られていなかった。

1907年10月に外務省政務局で印刷された同復命書は、伊犁の部、塔爾巴哈台の部、結論、付録等の四部分からなっており、その構成は次のとおりである。

伊犁ノ部

- 第一、地理及交通
- 第二、時令
- 第三、官制及兵備
- 第四、露国人ノ勢力及施設
- 第五、人種風俗及宗教
- 第六、商業事情
- 第七、通貨
- 第八、農業及牧畜
- 第九、鉱山
- 第十、勞銀及物価
- 第十一、通信制度
- 第十二、新疆ニ於ケル蒙古王

塔爾巴哈台ノ部

- 第一、一般ノ地勢位置
- 第二、塔城ノ位置及部落
- 第三、塔爾巴哈台ノ官制及兵備
- 第四、四季ノ氣候
- 第五、交通、道路ノ情況及運搬法、運賃
- 第六、人種及風俗宗教
- 第七、農業牧畜及物産
- 第八、商業事情
- 第九、通貨ノ種類及銀行
- 第十、露国居留地ト居留民
- 第十一、哈薩克問題
- 第十二、露清国境事情

結 論

露国ノ新疆經營

清国ノ新疆經營及吾人ノ取ルベキ方針

付 録

新疆迪化ヨリ伊犁塔城ニ至ル里程表

## 新疆旅行日程

以上の項目から分かるように、この復命書は、伊犁を中心とする新疆地域の地理・気候・交通・兵備・民族、および風俗習慣・経済・商業・通信・ロシア勢力・その施設等について詳しく記している。とくに旅行中に蒙古東路土爾扈特郡王府に40日間以上滞在して、新疆モンゴル族について詳しい記録を残している。東路土爾扈特郡王であった巴爾塔氏は日本留学経験があり、蒙古王公の中では開明的王公として知られている。今回の調査旅行をきっかけとして、林出は新疆巡撫の依頼によって、1907年10月にふたたび新疆入りし、法政学堂・陸軍学堂の教官を務めている。

### ②波多野養作「新疆視察復命書」

ウルムチ派遣員波多野養作。1882年生。北九州出身。1905年、同文書院政治課卒業。1905年9月、蘭州に一カ月滞在后、12月に新疆迪化に到着し、同地に11カ月滞在して調査を実施。1906年12月、蘭州に戻り、1907年2月に青海省各地を調査し、6月に東京に帰国。

前述した大林氏と藤田氏は、波多野の遺族から入手した日記等の原稿を整理して、その調査旅行について紹介している。その原稿は波多野が外務省に提出した復命書の一部であると思われる。1907年8月、『新疆視察復命書』が外務省政務局で印刷されたが、マル「秘」資料であったため、公開以前は知られていなかった。その構成は次のとおりである。

## 第一章 行程

### 第一節 北京ヨリ蘭州到着

### 第二節 蘭州ヨリ青海ニ至ル

### 第三節 附図地誌

### 第四節 包頭ト帰化城、蒙古開墾

## 第二章 交通

### 第一節 新疆ノ交通路

### 第二節 露清ノ交通

### 第三節 新疆ノ地勢ヲ論ス

### 第四節 露清ノ郵便電信

### 第五節 黄河ノ水利 附羊毛ノ運搬

## 第三章 人種

第一節 小教即チ「トンガン」

第二節 土耳機斯坦人

第三節 蒙古人

第四節 唐古忒人

第五節 哈薩克人

第六節 漢人ノ發展ト諸人種ノ関係

第七節 露清境上種族ノ混沌

第四章 喇嘛教

第一節 達賴喇嘛

第二節 達賴ト時局

第三節 達賴ノ地位、達賴ト英露

第五章 物産及商業貿易

第一節 物産

第二節 清国商人

第三節 輸出入商及境上貿易

第四節 商業通路

第五節 新疆通貨

第六章 政治事情

第一節 露国領事及兵營

第二節 新疆ニ於ケル清国官吏

第三節 新疆ノ兵備ト將軍長庚

第四節 董福祥及端郡王

附 録 旅行日程

③桜井好孝「蒙古視察復命書」

コブト派遣員桜井好孝。1905年7月、北京を出発、西安・蘭州・迪化を経て、1906年5月に科布多に到着。8月、烏里雅蘇台、クーロンへ出かけ、兩地でそれぞれ十日間以上滞在して調査後、1906年12月に北京に帰着。東亜同文会における桜井の報告は、「新疆蒙古旅行談」（『東亜同文会報告』第86、87回）に掲載されている。外務省に提出された『蒙古視察復命書』は、1907年2月に外務省政務局でマル「秘」資料として印刷された。蒙古之部と新疆之部という二つの内容から構成され、その構成は

次のとおりである。

#### 蒙古ノ部

- 第一、科布多ノ位置及行政区画
- 第二、科布多ノ兵制
- 第三、蒙古ニ於ケル人種
- 第四、蒙古ノ氣候
- 第五、蒙古ノ物産
- 第六、蒙古ノ交通事情
- 第七、蒙古ニ於ケル商業事情
- 第八、蒙古ニ於ケル牧畜ノ現況及将来 附風俗人情
- 第九、露国ノ政治的活動
- 第十、烏里雅蘇台界約記略
- 第十一、阿爾泰山ノ現況及将来

#### 新疆ノ部

- 第一、新疆位置
- 第二、新疆ニ於ケル交通狀況
- 第三、新疆ニ於ケル人種
- 第四、新疆ニ於ケル商業事情
- 第五、蒙古旅行日程

#### ④三浦掄『外蒙古視察復命書』

クーロン派遣員三浦掄の任務は、外蒙古クーロンにおけるロシア勢力について調査することであつた。1905年7月、三浦は北京を出発、9月に庫倫に到着し、同地で8カ月間調査を行った。1906年5月、外務省の帰国命令を受け、途中内蒙古・北京等を経由して日本に戻つた。提出した報告書が「外蒙古視察復命書」という題名で、マル「秘」資料として外務省政務局で印刷された。その構成は次のとおりである。

#### 一、庫倫略図

#### 二、庫倫概況

地理（位置、地勢、氣候、市街）

在住各種族ノ職業（人口総数、蒙古人、支那人、西藏人）

庫倫行政一斑（行政機関、弁事大臣、）



三、露国ノ経営

四、蒙古ニ於ケル露国ノ将来ヲトス

五、蒙古人ノ對外觀ト對露觀

漠北蒙古人ノ接スル外国文明勢力

蒙古人ノ清朝ニ服シツツアル所以

南北蒙古人ノ氣質

南北蒙古人ノ目ニ映ル外国（附日露戦争）

蒙古人ノ對支那人觀

六、對蒙古策私議

對蒙古策ノ必要

對蒙古策ノ根本問題（一挙掃蕩策ト抵抗經營策）

根本問題ノ解決（既往ニ於ケル日本民族發展ノ趨勢ト将来ノ蒙古）

今日之急務

外国人ノ蒙古ニ對スル注視

当局者ニ對スル予ノ希望（重要地開放、庫倫ニ官營の商店ヲ開設スルコト）

⑤草政吉「外蒙古視察復命書」

ウリヤスタイ派遣員草政吉。1905年7月、草は北京を出發、張家口經由で9月に外蒙古クーロンに到着した。クーロンに二週間ほど滞在してのち、ウリヤスタイ等の各地で調査を行った。1906年に帰国し、東亜同文会や外務省で調査旅行について報告した。東亜同文会における草の報告は「蒙古旅行談」（『東亜同文会報告』第82回、1906年9月）に掲載され、外務省への報告書は、1906年9月にマル「秘」資料として、「外蒙古視察復命書」が印刷されている。その構成は次のとおりである。

一、北京ヨリ外蒙古ニ至ル道路並ニ外蒙古内地ニ於ケル諸道路と交通機關

二、外蒙古ノ氣候ト物産

三、外蒙古人ノ衣食住

四、牧畜ト喇嘛教

五、喇嘛教勢力ト太頼喇嘛

六、政治附活佛

七、外蒙古ニ於ケル主ナル都府ノ現況ト特殊事情

八、蒙古字音ト我カ邦音

九、蒙古ノ禮式

十、外蒙古ニ於ケル羊毛ノ狀況ト所感

1907 年、外務省は以上 5 人の調査旅行の経費として、清国調査旅行補助費」3 年分 3 万円を東亜同文書院に支給した。この経費補助が同文書院の本格的な調査旅行の重要なきっかけとなり、1907 年以降ほとんど毎年同文書院学生による中国各地の大調査旅行が終戦まで継続された。

## Ⅱ 清末期の内蒙古調査旅行

1907 年、東亜同文書院第五期生から、中国各地の現地調査旅行が本格的に開始された。第 5 期生は 8 つの調査班に分かれて各地を調査したが、蒙古地域を対象とする調査班はなかった。しかし、京漢隊の石黒昌明等 4 人は、予定どおり京漢線調査旅行を終えてのち、9 月に残りの時間を利用して内蒙古カラチン右旗を目指して北京を出発し、途中密雲県、古北口、滦平県を経て、承德に到着した。当時の旅行日誌には、承徳の学校・警察・兵備・農業・商業・交通・金融機関・貨幣について記録している。第 5 期生の旅行誌『踏破録』には、熱河（承德）までの旅行日誌「熱河紀行」が収録されている。

1908 年 7 月、第 6 期生は 12 の調査班に分かれて各地を調査し、晋蒙隊と口外喇嘛廟熱河隊が蒙古地域に入っている。1908 年 7 月 10 日、玉生武二郎・梅津理・宮崎吉蔵等 5 人からなる晋蒙隊は、上海を出発し、途中天津・北京・南口・居庸関を経て、張家口から調査地域に入り、西方のチャハル・帰化城を通して、オルドス・包頭に到達し、10 月 24 日に上海に戻っている。晋蒙班の調査は、おもに上述の諸都市で実施され、調査報告書には張家口、ドロノール・豊鎮・帰化・包頭等の諸都市について詳細な記録が残されている。晋蒙隊は『晋蒙線調査報告書』を提出し、第 6 期生の旅行誌『禹域鴻爪』の中に彼らの旅行日誌「晋蒙隊旅行記」が収録されている。『晋蒙線調査報告書』の構成は、次のとおりである。

第一卷

- 第一編 山河形勢
- 第二編 気候風土地味
- 第三編 交通運輸及税関
- 第四編 都市及人口
- 第五編 教育
- 第六編 宗教
- 第七編 風俗人情

第二卷

- 第一編 労働者及資本家事情
- 第二編 外国人企業及勢力
- 第三編 人民生活状態
- 第四編 各種生産事業

第三卷

- 第一編 貿易大勢
- 第二編 重要商品
- 第三編 商業慣例
- 第四編 商賈組合
- 第五編 貨幣及金融
- 第六編 度量衡

口外喇嘛廟熱河隊は田中吉佐等が参加し、『口外喇嘛廟熱河線調査報告書』を提出し、『禹域鴻爪』の中に彼らの旅行日誌「蒙古旅行」が収録されている。熱河隊の調査地域はドロノール・カラチン部、熱河一帯で、内容が非常に詳しい。清末期の同地域に関する資料が少ないので、熱河隊による調査の資料的価値は高い。同報告書の構成は、次のとおりである。

第一卷

第一編 地理（承德府）

第一章 序説

第二章 位置及区域（承德府、滦平县、豊寧県、平泉州、赤峰県、建昌県、朝陽県）

第三章 人口及面積

第四章 沿革

第五章 地勢

第六章 氣候

第七章 人情風俗

第八章 都邑

第二編 地理（北京古北口間）

第三編 地理（多倫諾爾）

第一章 位置及地勢

第二章 人口及面積

第三章 氣候

第四章 人情風俗

第四編 地理（山海關及秦皇島）

第五編 清國藩部行政

第一章 序言

第二章 一般行政

第三章 藩部一般行政

第四章 多倫諾爾行政

第五章 圍場府行政

第六章 喀喇沁部行政

第七章 承德府行政

第八章 山海關行政

第九章 結論

第二卷

第一編 物産

第二編 人民生活程度（喀喇沁部付近人民生活程度を含む）

第三編 労働者事情（喀喇沁部労働者を含む）

第三卷

第一編 農業牧畜業林業

第一章 序言

第二章 北京多倫諾爾間

第三章 多倫諾爾牧畜業

第四章 多倫諾爾圍場間

第五章 喀喇沁部

第六章 喀喇沁部農業改良と利用

第七章 喀喇沁部承德府間

第八章 承德府

第九章 山海関

第二編 工業及鉱業（多倫諾爾、喀喇沁部、熱河の工業鉱業を含む）

第三編 商業（多倫諾爾、熱河の商業を含む）

第四編 貨幣及金融

第五編 度量衡

第六編 交通税関

1909年7月、第7期生による現地調査旅行が13班に分かれて実施され、関内外蒙古隊が蒙古地域に入った。塩路樹雄・矢部仁吉・尾藤正義・富士木鷹二・甲斐友比古等5人からなる調査班は、7月5日に上海を出発、7月28日に承德に到達し、おもに承德・平泉・建昌・赤峰・建平・朝陽・錦州・山海関等の諸都市で現地調査を実施して、『関内外蒙古線調査報告書』を提出した。第7期生の旅行誌『一日一信』には、彼らの旅行日誌「野原めぐり」が収録されている。同報告書の構成は、次のとおりである。

第一卷

第一編 口外蒙古沿道形勢

第一章 総説

第二章 地質

第三章 地形

第四章 山岳

第五章 河流

第六章 道路

第七章 住民

第八章 物資

第九章 経過地沿道記事

第二編 気候

第三編 都会

第一章 口外之部

第一節 平泉（位置及地勢、人口戸数及住民、生活状態、市街、行政軍事、教育、宗教、工業、鉱業、商業、金融、交通運輸機関等を含む）

第二節 建昌（同上）

第三節 赤峰（同上）

第四節 建平

第五節 朝陽

## 第二章 関内外之部

第四編 人情風俗

第五編 交通運輸

第六編 税関

## 第二卷

第一編 田圃及宅地

第二編 農業

第三編 牧畜業

第四編 林業

第五編 工業

第六編 鉱山業

第七編 物価

## 第三卷

第一編 貿易大勢

第二編 商賈及組合

第三編 貨幣及度量衡

第四編 金融

第五編 重要商品

1910年7月、第8期生の現地調査旅行は11班に分かれて実施されたが、錦斉線調査班と甘肅オールドス班が内蒙古に入っている。錦斉線調査班の班員は岡本喜代治・武樋長次・飯塚重史・佐藤信二・三田義一・後藤禄郎等6人である。錦斉調査班は『錦斉線旅行隊調査報告書』を提出し、第8期生の旅行誌『旅行記念誌』には旅行日誌「蒙古遊記」が収録されている。同報告書の構成は、次のとおりである。

第一卷 地理

第一編 沿道形勢

第一章 総論

第二章 各論

第二編 都市

第一章 総論

第二章 各論（阜新、小庫倫、彰武、康平、鄭家屯、洮南府、開通等の都市における位置及沿革、人口戸数、行政、兵備、教育、宗教、工業、商業についての内容を含む）。

第三編 行政

第一章 総論

第二章 蒙古行政官治機関

第三章 蒙古自治機関

第四章 戸口調査

第五章 特種機関

第六章 軍制

第七章 裁判

第八章 土地開放と収租

第九章 蒙古財政

第十章 結論

第四編 交通運輸

第一章 総論

第二章 運輸機関

第三章 水運

第四章 運輸季節

第五章 包装

第六章 郵便

第五編 厘金局

第一章 総論

第二章 錦州税捐局

第三章 朝陽税捐局

第四章 小庫倫税捐局

第五章 康平税捐局

第六章 鄭家屯税捐局

第七章 洮南税捐局

第二卷 經濟

第一編 田圃及宅地

第二編 農業

第三編 牧畜業

第四編 工業

第三卷 商業

第一編 鄭家屯（位置及沿革、商況、物価、商店及組織、取引習慣などを含む）

第二編 洮南（同上）

第三編 小庫倫（同上）

第四編 錦州（同上）

第五編 貨幣及金融

序 説

甲編 東部蒙古

乙編 塞外蒙古

甘肅オルドス班の班員は村山・小笠原・功力・大西・綱田等5人からなり、『旅行記念誌』には旅行日誌「甘肅鄂爾多斯班記」が収録されている。同報告書の構成は、次のとおりである。

第一卷 地理

第一編 沿道形勢

第二編 気候

第三編 軍事及教育

第四編 陸運

第五編 税関

第二卷 經濟

第一編 農業

第二編 牧畜業



第三編 林業

第四編 鉱業

第五編 工業

第六編 田圃及宅地

第七編 外国人企業及其勢力

第八編 物価

第九編 資本家

第十編 生活程度

第十一編 物資

第三卷 商業

第一編 金融

第二編 貨幣

第三編 度量衡

第四編 組合

第五編 商賈

第六編 商業

第七編 市

1911年から1915年にかけて、東亜同文書院第9期～第13期の学生達による現地調査旅行が例年どおり実施されたが、その旅行コースは中国内地に集中し、蒙古地域への調査旅行は行われなかった。当時、辛亥革命の勃発によって清朝の支配が瓦解し、中華民国が成立した結果、中国政治は複雑な混乱状態に陥り、外蒙古でも独立運動が起きて新政権が誕生し、内蒙古は不安定な状態に置かれていた。こうした状況が同文書院生の現地調査旅行に影響を及ぼしたと思われる。

現在、愛知大学に保存されている資料から判断して、この時期の調査報告書は、調査地域の地理・気候状況・経済・商業等のあらゆる分野を含み、調査報告書の内容も詳細で分量が多い。このような状況は、1915年の第13期生の調査まで続いている。中国全体で蒐集した膨大な現地調査資料を基礎として、1915年から東亜同文会編纂『支那省別全誌』（全18巻）の刊行が開始されている。そのためか、1916年以降の調査報告書の内容には、簡略された傾向が認められる。

### Ⅲ 満洲事変以前の内蒙古調査旅行

1916年7月、第14期生による現地調査旅行が実施され、そのうち北満班と関外班の調査地域に蒙古の一部が含まれている。関外班の班員は鈴木謙吉・柴田七郎等からなり、旅行ルートは大連—撫順—奉天—法庫門—彰武—義州—朝陽府—赤峰—圉場—ドロノール—独石口—張家口—北京—天津—上海である。第14期生の旅行誌『風餐雨宿』には関外班の旅行日誌「朔漠行」が収録されている。北満班の調査報告書は、『第十回支那調査報告書』「第三巻 関外地方」に収録され、その構成は次のとおりである。

#### 第一編 地理

##### 第一章 総論

##### 第二章 奉天法庫門間

##### 第三章 法庫門彰武間

##### 第四章 彰武義州間

##### 第五章 義州朝陽間

##### 第六章 朝陽赤峰間

##### 第七章 赤峰圉場間

##### 第八章 圉場多倫諾爾間

##### 第九章 多倫諾爾独石口間

##### 第十章 独石口張家口間

#### 第二編 都会

第一章 法庫門（各章は5～7節で構成され、おもに概況・位置及沿革・戸数人口・市況・官衙・商務機関・教育機関・寺廟・病院・生業・商業概況・商店・商業範囲・貨物集散・交通・繁閑・生計程度等を記し、各節の構成もほぼ同じである）。

##### 第二章 彰武

##### 第三章 義州

##### 第四章 朝陽府

##### 第五章 赤峰

##### 第六章 圉場

##### 第七章 多倫諾爾

第八章 独石口

第九章 張家口

第十章 北京

第十一章 天津

第三編 水運及鉄道（大連水運、京張鉄道、京奉鉄道、満蒙地方予定鉄道等五章からなる）

第四編 貨幣金融度量衡（第二編「都会」に挙げた都市の貨幣・銀行・度量衡等を述べている）

第五編 物産（第一章「東蒙古の経済価値」は概説。以下前述した各都市の物産について記している）

第六編 東部内蒙古における輸入品

第七編 関外農工業

北満班の班員は高山邦臣・栃木理一等からなり、調査地域はおもに奉天・吉林・黒龍江で、旅行途中に蒙古地域を経過した。北満班の調査報告書は、『第十回支那調査報告書』「第一巻 北満」「第十三章 蒙古産甘草」に収録されている。第14期生の旅行誌『風餐雨宿』には、北満班の旅行日誌「日長夜短記」収録されている。

1917年6月から第15期生の現地調査旅行が開始され、濱田唯喜・大塚一郎等5人の班員からなる内蒙古班が、蒙古地域で調査旅行を行った。旅行ルートは上海—大連—奉天—長春—農安—洮南—開通—鄭家屯—白音他拉—莫力廟—開魯—奈曼王府—下窪—海力王府—赤峰—熱河—北京—上海である。第15期生の旅行誌『利涉大川』には、内蒙古班の旅行日誌「内蒙古の旅」が収録されている。『第十一回支那各地旅行報告書』「第十五巻 満蒙各地金融及貨幣度量衡」は、内蒙古班の調査報告書である。その構成は次のとおりである。

第一編 金融

第一章 大連（以下、蒙古地域以外は省略）

第八章 遼源州及鄭家屯

第九章 白音他拉

第十章 開魯

第十一章 赤峰

## 第十二章 北京

### 第二編 貨幣及度量衡（以下、各章タイトルは第一編と同じ）

1920年7月、第18期生の現地調査旅行が行われ、蒙古羊毛調査班（内蒙古班）と天津を中心とする羊毛調査班が内蒙古に入っている。内蒙古班の班員は湯畑爆弾・原田慶二・草野松雄・浜吉公望等4人からなり、当初黒龍江航運調査を目的として出発したが、ロシア軍がシベリヤ・黒龍江に侵入したので、調査地域を急遽内蒙古に変更している。その旅行ルートは、大連—奉天—公主嶺—四平街—鄭家屯—洮南—突泉—図什業図—東西扎魯特—アルコルチン—大巴林—林西—烏丹—赤峰—朝陽—錦州—天津である。『第18期生支那調査報告書』には内蒙古班の調査報告書は収録されていないが、第18期生の旅行誌『粵射隴遊』には、内蒙古班の旅行日誌「興安騎行」があり、旅行中に通過した蒙古地域に関する記述がある。

天津を中心とする羊毛調査班の班員は、横田・久保・佐藤等5人からなり、その旅行ルートは、上海—南京—漢口—鄭州—石家荘—太原—忻州—代州—朔州—朔平—清水河—トクト—包頭—帰化—豊鎮—大同—張家口—北京—天津—上海である。清水河・トクト・包頭・帰化・豊鎮・張家口等は、綏遠特別区・チャハル特別区に帰属する蒙旗と並存する街である。年第18期生の旅行誌『粵射隴遊』には、羊毛調査班の旅行日誌「晋山朔漠」が収録されている。『第十三回支那調査報告書』「第三卷 天津を中心とする羊毛皮」の「第四編 張家口における羊毛及羊皮」は、同調査班の報告書で、張家口における羊毛と羊皮の種類・産地・産額・用途・運輸・価格が詳しく記録されている。

1921年7月、第19期生の現地調査旅行が実施され、東蒙古鉅業調査班と隴綏羊毛羊皮調査班が蒙古地域に入っている。東蒙古鉅業調査班の班員は大脇・丸森等からなり、第19期生の旅行誌『虎穴龍頤』には同調査班の旅行日誌「ハンマーの旅」が収録されている。『第十五回支那調査報告書』「第六卷 東蒙古鉅業調査」は、東蒙古鉅業調査班の報告書と見られるが、その内容は東部蒙古の鉅業とあまり関係がない。

隴綏羊毛羊皮調査班の班員は、富田清蔵・和田平市等からなり、調査地域はおもに青海・甘肅地域で、西部内蒙古の綏遠における羊毛調査を実施している。第19期生の旅行誌『虎穴龍頤』には、同調査班の旅行日誌「青

海行」が収録されている。隴綏羊毛羊皮調査班の調査報告書は、『第十五回支那調査報告書』「第八卷 甘肅綏遠地方における羊毛」に収録され、これら地域における羊の種類・飼育方法・繁殖法・疾病、および羊毛産地・品質・取引慣習・運輸等が詳しく記録されている。

1922年6月、第20期生の現地調査旅行が実施され、田崎庫三・大井格三等5人の班員からなる熱河特別管区経済調査班が内蒙古に入った。その旅行ルートは、上海—北京—古北口—熱河—豊寧—ドロノール—経棚—林西—大巴林—烏丹—赤峰—錦州—大連—上海である。第20期生の旅行誌『金声玉振』には、同調査班の旅行日誌「興安の月に騎して」が収録されている。『第十六回支那各地調査報告書』「第二卷 熱河経済調査」は、同調査班の調査報告書である。同文書院の現地調査は、おもに調査対象地域の経済・商業状況の調査を目的としており、政治状況についてはあまり触れていない。しかし、同報告書の「第三章 行政」は、熱河特別区の行政区域・行政機関・蒙旗行政・移住漢民管理行政について記すほか、中華民国成立後に制定された「蒙古待遇条例」「蒙蔵回議員選挙法」「蒙人服官内地方法」「蒙人甄試章程」等を取り上げている。その構成は次のとおりである。

第一編 運送及輸出入

第一章 輸出入経路

第二章 主要な輸出入品及数量

第三章 熱河貨物牲畜税目及税率

第二編 熱河特別管区行政地理

第一章 総論

第二章 地理

第三章 行政

1925年には第22期生による現地調査旅行が実施され、三つの調査班が蒙古に入っている。第一の北満及国境調査班は、石川悌次郎・神田耕三等が参加し、その旅行ルートは、吉林—ハルピン—同江—大黒河—瑯琿—チチハル—満州里—ハイラル—平壤で、満州里・ハイラル等の蒙古地域に入っている。第22期生の旅行誌『乗雲騎月』には、同調査班の旅行日誌「アムールの悲歌」が収録されている。『第十九回支那調査報告書』には、満州里・

ハイラル等を含むホロンバイル地域に関する記載は見当たらない。

第二の山西綏遠調査班は、堀田捻・籠谷武等が参加し、その旅行ルートは、运城—太原—包頭—大同—張家口で、第 22 期生の旅行誌『乗雲騎月』には同調査班の旅行日誌「晋国苦行」が収録されている。『第十九回支那調査報告書』「第八卷 山西綏遠の産業と交通」は、同調査班のものと見られる。その構成は次のとおりである。

- 第一編 山西綏遠の薬材
- 第二編 山西省棉花（一）
- 第三編 山西綏遠の羊毛及毛織物
- 第四編 山西省棉花（二）
- 第五編 山西綏遠の交通
- 第六編 山西綏遠における羊毛

第三の北支満蒙班は、奥田信清・荒木知七等が参加し、その旅行ルートは、錦州—朝陽—北票—義州—新立屯—奉天—四平—鄭家屯—通遼—ハルピンである。『乗雲騎月』には同調査班の旅行日誌「北支紀行」が収録されている。『第十九回支那調査報告書』「第十七卷 京奉沿線の産業及其他」の「第五編 満蒙羊毛」「第六編 蒙古甘草」に蒙古に関する記述がある。そのおもな内容としては、東蒙古の羊毛市場・羊毛産量・集散地・価格・輸出税、および蒙古産甘草の種類・加工・取引状況を詳しく記録している。

1926 年、第 23 期生の現地調査旅行が実施され、今井正人・吉田均一・森春雄等の満蒙経済調査班が蒙古地域を旅行した。その旅行ルートは、上海—漢口—鄭州—石家庄—北京—天津—錦州—義州—北票—朝陽—赤峰—開魯—白音太来—鄭家屯—洮南—昂昂溪—チチハル—ハルピン—長春—奉天—撫順—遼陽—大連—上海である。第 23 期生の旅行誌『黄塵行』には同調査班の旅行日誌「砂丘を越えて」が収録されている。『第二十回支那調査報告書』「第四卷 京綏沿線経済調査」の「第二編 東蒙北満都邑」「第三編 東蒙北満牧畜業」は、同調査班の報告書である。「東蒙北満都邑」では、旅行中経過した都市における位置・沿革・戸数人口・交通・官衙・学校・兵営・宗教・貨物集散・工商業・金融等を、「東蒙北満牧畜業」では、東蒙北満の牧畜業大勢、家畜種類、牧畜改良事項、および利用方法、家畜繁殖率と死亡率等について記している。

1928年5月に第25期生の現地調査旅行が実施され、3つの調査班が蒙古に入っている。第一の満蒙経済調査班の班員は和田喜一郎・塩原長衛等5人からなり、その旅行ルートは、上海—青島—大連—奉天—打虎山—通遼—鄭家屯—洮南—チチハル—満州里—ハルピンである。第25期生の旅行誌『線を描く』に同調査班の旅行日誌「印象所々」が収録されている。『第二十二回支那調査報告書』「第二巻 打通平斉鉄道沿線経済調査」は、同調査班の調査報告書で、その構成は次のとおりである。

第一編 満州における高粱包米調査

第二編 満州における支那殖民

第三編 打通線

第四編 東部内蒙古における甘草調査

第五編 東蒙及東支鉄道沿線牧畜業調査

第二の北満国境経済調査班Bの班員は、城台正・土屋弥之助等6人からなり、旅行の途中に満州里等のホロンバイル地域を経過している。『線を描く』には、同調査班の旅行日誌「サハリンへ行く」が収録されている。『第二十二回支那調査報告書』「第八巻 北満国境経済調査」は、ホロンバイルにおける牧畜業について記録している。

第三の東三省市勢調査班の班員は、中村一雅・佐藤敏夫等5人からなり、その旅行ルートは、上海—青島—大連—旅順—奉天—長春—吉林—ハルピン—チチハル—昂昂溪—満州里—洮南—鄭家屯—奉天—撫順—上海で、満州里等に関する調査記録が作成され、『線を描く』には同調査班の旅行日誌「胡砂朔風」が収録されている。

1929年、第26期生による現地調査旅行が実施され、3つの調査班が蒙古地方を旅行している。中尾義男・佐多直丸等5人からなる調査班は、京綏鉄道で包頭まで旅行し、第26期生の旅行誌『足跡』に同調査班の旅行日誌「朔北を往く」が収録されている。山名正孝・村松彰等5人の班員が参加する調査班は、打通線で打虎山から通遼へ入り、鄭家屯・洮南・昂昂溪等を旅行し、『足跡』に同調査班の旅行日誌「砂風愛撫」が収録されている。第三の調査班は、大連・新民府・四平街を経て、通遼・鄭家屯・洮南等を旅行し、『足跡』に同調査班の旅行日誌「轍跡」が収録されている。『第23回支那調査報告書』「第十五巻 内蒙古における牛乳」「第六十七巻

内蒙古政治経済事情」「第八十一卷 外蒙古貿易交通兵備」は、内蒙古地域を対象としている。

1930 年、第 27 期生の現地調査旅行が実施され、3 つの調査班が蒙古地域に入っている。第一の正太沿線山西北部経済調査班の班員は、数村吉之助・後藤隆三・村田季雄等 3 人からなり、その旅行ルートは、上海—青島—天津—北京—正定—石家庄—太原—大同—帰化城—包頭—帰化城—大同—張家口—北京—天津—大連—上海で、帰化・包頭等の西部内蒙古の都市を含んでいる。第 27 期生の度旅行誌『東西南北』に同調査班の旅行日誌「三人の旅」が収録されている。

第二の東蒙古経済調査班の班員は、橋本義雄・今泉正民等 7 人からなり、その旅行ルートは、上海—北平—平泉—赤峰—開魯—白音太来—鄭家屯—洮南—昂昂溪—チチハル—ハルピン—長春—奉天—旅順—大連である。『東西南北』には同班の旅行日誌「東蒙の旅」が収録されている。

第三の満蒙経済調査班の班員は、前田進・真柄富治等 5 人からなり、その旅行ルートは、上海—打虎山—新立屯—白音太来—鄭家屯—洮南—チチハル—ハルピン—長春—大連である。『東西南北』には同調査班の旅行日誌「裸像の満蒙を観る」が収録されている。

『第二十四回支那調査報告書』は、蒙古に関する内容がかなり豊富であるが、どの報告書がどの調査班によるものか確認できなかった。その大要は、次のとおりである。

第 7 卷「熱河省交通」

第 13 卷「満蒙農業事情」

第 16 卷「東蒙古における甘草阿片調査 附東蒙古衛生調査」

第 17 卷「東蒙古における資源と商取引慣習及金融概論」

第 18 卷「満蒙羊毛」

第 26 卷「東蒙古における鉱山業」

第 57 卷「東蒙古都邑調査」

第 58 卷「正太沿線山西北部羊毛調査」

第 59 卷「東蒙牧畜業」

第 60 卷「東蒙及北満における羊毛皮革」

1931 年 6 月、第 28 期生による現地調査旅行が実施され、4 つの調査班



が蒙古に入っている。第一の露支国境遊歴班の班員は、岡部善修・浅野修等5人からなっている。その旅行ルートは、上海—青島—済南—北平—天津—大連—旅順—撫順—奉天—四平街—鄭家屯—洮南—昂昂溪—満州里—ハイラル—チチハル—ハルピンで、満州里・ハイラル等を含むホロンバイル地域で調査を実施している。第28期生の旅行誌『千山万里』に同調査班の旅行日誌「アムールの流れ」が収録されている。

第二の津浦打通線班の班員は、高橋房雄・西由五郎等4人からなり、その旅行ルートは、上海—南京—徐州—済南—天津—北平—錦州—打虎山—通遼—鄭家屯—洮南—チチハル—ハルピン—長春—吉林—奉天—大連で、打通線で東蒙古に入っている。『千山万里』に同調査班の旅行日誌「挿秧秋麦熱砂」が収録されている。

第三の北満遊歴班の班員は、高橋武雄・三木善吉等6人からなり、旅行ルートは、上海—青島—済南—北平—天津—大連—旅順—営口—通遼—鄭家屯—洮南—チチハル—克山—昂昂溪—ハルピンである。『千山万里』に同調査班の旅行日誌「旅の印象」が収録されている。

第四の黒龍江省遊歴班の班員は、小島桂吾・坂井佳彦等4人からなり、その旅行ルートは、上海—青島—済南—北平—天津—大連—奉天—四平街—洮南—昂昂溪—チチハル—ハイラル—満州里—ハルピン—長春—大連である。『千山万里』に掲載された同調査班の旅行日誌「東支線を行く」には、ホロンバイルに関する記述がある。